令和６年度　国立吉備青少年自然の家教育事業
国立青少年教育振興機構とモンベルとの連携事業
SEA TO SUMMIT for Children in KIBI

## １．事業の目的（趣旨・ねらい）

人力で海から里、そして山へと進む中で、自然の循環を体感し、かけがえのない自然 について考えるとともに、仲間と困難に立ち向かい、声を掛け合いながら克服する喜びを味わう。

## ２．事業の概要

### （１）期日

令和６年９月２１日（土）～９月２３日（月）２泊３日

### （２）参加者

① 募集対象・人数

全日程に参加できる小学校５年生～中学校３年生　２０人程度

② 参加人数

２０人

### （３）講師等

西川　竜馬　氏　（岡山県渋川青年の家　所長）
神原　直也　氏　（株式会社サンキョウエンビックス　環境調査部門リーダー）

### （４）企画・運営のポイント

① 参加者が達成感を味わう体力的な負荷のある企画にするため、海のステージではカヤック、里のステージではマウンテンバイク、山のステージではではハイキングを設定した。さらに、各ステージで楽しむことができるように、所員の特技を生かしたチェックポイントを設けるなどの工夫をする。

② 開催参加者が活動を安全に楽しみながら行うことができるように、猛暑を避ける意図で９月下旬に実施した。

③ 各ステージでの体験と環境学習と関連をもせることで、それぞれの活動を単発で行うのではなく、体験したことや学んだことが次の活動で生きるようにする。

④ 環境学習に株式会社サンキョウエンビックスより講師を招き、専門性の高い講義演習を行う。

⑤ キャンプがもたらす影響を調査するために中国短期大学の土田豊氏に協力を依頼した。

⑥ ＳＮＳで随時活動を保護者やフォロワーに伝える。

⑦ 実行委員会を設立し、学校教育、社会教育、研究者、環境の専門家、企業と様々な視点からのアドバイスをもとに企画・運営をする。

## ３．活動の内容等

### （１）日程

| 日数 | 日付 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1日目 | 9/21（土） | | | | 受付 | 海のステージ（カヤック） | | | 昼食 | オリエンテーション | 環境学習 | | 入室 | 夕食 休憩 | 振り返り | 入浴 | 就寝準備 | 就寝 |
| 2日目 | 9/22（日） | 就寝 | 起床 洗面 清掃 | 朝食 | 点検 退所準備 | 移動 | 入室 | 昼食 | 里のステージ（マウンテンバイク） | | 環境学習 | | 誓連絡 | 夕べのつどい 夕食 | 振り返り | 入浴 | 就寝準備 | 就寝 |
| 3日目 | 9/23（月） | 就寝 | 起床 洗面 清掃 | 朝のつどい 朝食 | 点検 | 山のステージ（ハイキング） | | 昼食 | 環境学習 | 振り返り まとめ | 閉会式 | | | | | | | |

（２）活動の状況

【海のステージ（カヤック）】

【環境学習①】

【里のステージ（マウンテンバイク）】

【環境学習②】

【山のステージ（ハイキング）】

【ゴール】

【環境学習③】

【発表】

## ４．成果・課題

### （１）満足度

満足　９２％、やや満足　８％

### （２）参加者の声

①　水が海、里、山とすべてにつながっていることがわかった。自然の中で活動すると、より深くそのことを感じられた。

②　住める生き物が水のきれいさによって違っていることがわかった。また、人間の行いによって自然界の生き物の生活が脅かされているということもわかった。

これからはＳＤＧｓを頭の隅において生活していきたい。

③　一つ一つのステージを乗り越えることで、仲間の大切さやあきらめない心を学ぶことができた。そして、どのステージも景色が素敵で楽しかった。

④　普段の生活では感じることができない空気、においを体で感じることができた。

### （３）成果

①　本事業は活動の準備等、見えないところでの職員の動きが多く必要である。全所体制で行うことで、しっかりと準備をすることができ、参加者の活動をスムーズに行うことができた。

また、山のステージでは、その日に出勤している職員を全員チェックポイントに配置した。参加者へは、チェックポイントで全職員からサインを集めるというミッションを与えた。参加者にとってたくさんの職員と触れ合うことは楽しみであったことが参加者の反応から分かった。

森林インストラクターの資格をもつ職員のチェックポイントでは、実験を行った。落ち葉や木の枝が土の中にあることが保水性につながること分かり、緑のダムについて理解できるようにした。その後のハイキングで、山を見る際の視点を持つことができた。

また、レクリエーションが得意な所員のチェックポイントでは、グループの絆が強まる時間を過ごした。参加者を楽しむことができるように各職員が工夫をし、全所体制で教育事業がより良くなるようにした。

【山をモデルにした実験】

【レクリエーション】

②　熱中症の心配はなく、適温のもと各ステージの活動を行うことができた。風を感じながら景色を楽しんで活動に取り組み、心地良く自然を楽しむ姿が見られた。

活動に適した気候で実施することは、参加者が安全に過ごすことができただけでなく、活動の質の向上にもつながった。

③　その後の環境学習で水質検査を行うことで、海のステージではカヤックを楽しむとともに、渋川海岸の水質を調べるために海水を採取するという目的意識をもたせ、つながりのある活動となった。

④　環境学習では、専門的な知識をもつ講師と連携することで普段経験できない実験を行うことができた。日常生活と関連付けることで興味を持つことができただけでなく、終わってからも「水を大切にしたい。」という感想が多く聞かれた。

⑤　各ステージを終え、環境学習の学びの後に振り返りの時間を設けた。アウトプットをする手段として模造紙に学びをまとめることを中心としたが、時間を多く取ることができないことが計画段階から予想された。限られた時間で全員が役割を果たすために、付箋や家庭用プリンターを活用することで活発なアウトプットが行うことができた。

【振り返り時間に作成された成果物】

また、山のステージではグループごとにコースをめぐるようにした。グループで地図を囲みながら山中を歩くことで、声を掛け合い周りの自然を意識しながらゴールを目指すことができた。

⑥　受付時にＳＮＳの二次元コードを配布し、保護者が随時活動を知ることができるようにした。ＳＮＳ担当の職員が魅力的な内容を考え、山のステージのゴールではライブ配信をすることで、生き生きと活動をする姿を伝えることができ、保護者にとっても安心感につながった。参加者や協力団体を通じて約３０人の Instagram のフォロワーを増やすことができた。

**（４）今後の課題**

「令和７年度 SEA TO SUMMIT for Children in KIBI」には、今年の参加者も参加することも考えられる。そのため、プログラムが前年度踏襲になるのではなく、より魅力的な内容になるように連携する講師や実行委員とブラッシュアップした内容になるように企画したい。

**担当：企画指導専門職　八木　雄治**